

12. 青年期女子の柔道に対する意識について

——青年中期の女性を中心として——

関東学園大学	高橋 進	講道館	村田直樹
	講道館	和歌山大学	矢野 勝
	防衛大学校	都立駒場高校	斉藤 聡
群馬県警察教養課	梶澤博之		

12. Consciousness Towards Judo Among Young Women.

Susumu Takahashi (Kanto Gakuen University)
 Teruo Kaise (Kodokan Judo Institute)
 Naoki Murata (Kodokan Judo Institute)
 Suguru Yano (Wakayama University)
 Kazunari Nakamura (Boei University)
 Satoshi Saito (Komaba High School)
 Hiroyuki Kabasawa (Gunma Police Academy)

Abstract

The purpose of this study was to investigate the following: (1) attitudes towards judo among young women; (2) the subjects' sports history, custom and need; (3) self-efficiency in sports; (4) need for physical education, and judo class; and (4) the relationships among factors.

The subjects of this research range from 18 to 31 years old. Attitudes towards judo and the other topics were measured by use of questionnaire prepared by Takahashi. Particularly the data of attitudes were analyzed by factor analysis techniques. The results were as follows:

1. Almost all the subjects liked sports, especially ball games, and were interested in many types of sports.

2. 77.2% of subjects experienced some sports in their school days, and they were motivated by

their interest in sports, or the influence of their parents or friends then.

3. It was suggested that the subjects had a good self-efficiency towards sports, and married subjects encouraged their husbands and children to play some sports.

4. The subjects thought that physical education was valuable at any stage of school education.

5. The subjects selected judo, football, sumo, baseball and skiing as the most popular sports in Japan. It is possible the selection of their favorite sports were influenced by mass media when they selected sports.

6. Eight attitude factors towards judo were extracted from factor analysis in young women. On one hand, judo was recognized to be a desirable effect on the body, mind and education. On the other hand, it was confirmed that judo was only for men, and it was not highly evaluated on brightness, refreshment and beauty in sports.

7. It was suggested that each factor scores of the group who needs judo in education was higher than that of the other group in the statistics.

I 緒言

柔道は、カラー柔道着採用に代表されるような国際化の怒濤のような波と、国内での競技人口減少により、柔道界自身を揺るがしている激震に、今正に転換期を迎えつつあるといっても過言ではあるまい。その前者である国際化の波は、柔道の普及に相俟って立つ波であり、方向を間違えなければ、問題視する必要性はないであろう。しかしながら、国内の柔道人口の減少は、本家でもある日本柔道界にとっては、遺憾ともしがたい大きな問題である。

勿論、かなり以前から、尾形¹⁰⁾、高橋¹¹⁾、矢野¹⁵⁾は、この事態を予測して柔道のイメージアップを叫び続けて来た。それは、柔道学習者の柔道に対する感情的側面での低い評価やイメージが悪いことに起因するものである。また、その対策としては、指導者の充実や学習方法の新たな確立が急務と考えられた。

一方、教育行政でも、「日本古来からの伝統文化の重視が、国際化社会における日本の立場を理解する上で必要である」との中央教育審議会の答申を受け、平成元年に、中学校、高等学校体育科の学習指導要領⁸⁾⁹⁾を改訂するとともに、柔道が含まれる領域名称を、従前の格技から武道に変更した。この改訂により、上述した、尾形¹⁰⁾、高橋¹¹⁾、矢野¹⁵⁾らが鳴らした警鐘は鎮まるかと思われた。しかしながら、少子化のためか教員の削減を余儀なくされ、柔道を専門とする教員等は、一向に増えないのが実状である。そのため、他の専門種目の教員が、中学校などの柔道の授業をもつケースが多く見られ、柔道の持つ、楽しさを十分に生徒に伝えられないまま授業が完結してしまうことも珍しくない。更に、中学校の課外クラブ活動などは、専門教員の不足が原因で思うような活動が展開されず、深刻な状況に追い込まれている。柔道部に関しても例に漏れず、クラブ自身を開設することができない中学校も増加の一途にある。

教育の一環として柔道が用意され、他の国とは一線を画している日本の柔道事情にあって、フランスなどの登録人口(50万人)のほうが、遙かに多いという矛盾(日本では、188,307人)は、以上にあげた指導者の問題だけを解決すれば全てが解決するというわけではなかろう。ましてや、競技人口の底辺が狭くなれば、ピラミッドも低くならざるを得ず、競技力の衰退を招いてしまう。

そこで本研究では、尾形¹⁰⁾、高橋¹¹⁾、矢野¹⁵⁾らが鳴らした警鐘を、敢えて再び打ち鳴らすこととした。また、日本の少子化の現状を鑑みて、調査対象を次世代の母親、すなわち青年期の女子とした。周知のことではあろうが、現在の学童期から青年前期の子供たちは、塾を始めとして実

に忙しい生活を余儀なくされている。このような現象は、母親の影響力が大いに関係していると考えられ、大学生の入学式でさへ、男子大学生に多くの母親が引率している姿が珍しくなくなった。このような状況は、正に少子化の影響の一つと考えられる。

いずれにせよ、次世代の母親予備軍、即ち青年期女子の柔道に対する意識を調査することで、近未来における柔道の一側面を予測することは可能であり、今後柔道界が取り組まなければならない諸々の課題を解決していく糸口になるのではないかと考える。

II 研究方法

フィッシュバインの行動予測モデルを集約し、スポーツ行動の予測モデルを確立した徳永¹⁷⁾によると、スポーツ行動が成立するためには、様々な規定要因が存在するが、男女ともに、重要な他者の要因が有効であることが指摘されている。即ち幼児期や学童期にあつては、両親の影響が、その子供のスポーツ行動を規定すると言っても過言ではあるまい。特に、日本における家庭状況を垣間見るに、子供の養育の主導権を握っているのは、母親と言える。

そこで、本研究では、緒言にもあるように、次世代の母親予備軍の柔道に対する態度や価値意識、あるいは、運動経験や運動に対する有能感などといった諸意識、あるいは、その要因間の因果関係を明らかにすることを目的とした。母親予備軍である、青年期女子の柔道に関する態度や、価値意識が良好であれば、その子供たちを柔道に向けさせる可能性は十分にある。また、現状分析をすることによって、柔道人口減少に対する更なる提言を得ることができるとも考える。

1. 調査対象・時期

T教員養成所に在籍する1年生から3年生までの女子（年齢は18歳から31歳、表1参照）149名。調査時期は、1998年5月。

2. 調査内容

質問紙の内容は、以下の項目・尺度から構成されている。

(1) 一般項目（対象者の属性）

性別、年齢、現在の運動習慣・種目、現在及び過去の運動クラブ活動経験、クラブ活動時の両親の理解、学校教育における体育の必要性、自身の子供への運動参加の適否、日本を代表する運動・スポーツ種目、その理由、運動・スポーツの好嫌、今後行いたい運動、運動に対する有能感、運動やスポーツの成績結果への賞賛経験など。（資料1 調査用紙参照）

(2) 柔道に対する項目

- ①自身の子供に柔道を学習させたいか否か、柔道クラブ活動をやらせたいか否か。
- ②柔道に対する態度尺度（感情的成分及び認知的成分から構成⁴⁾。高橋の尺度^{11) 12) 13) 14)}を参考）。

③柔道経験の有無

3. 分析方法及び手順

- ①一般項目については、適当と思われる項目番号に○印をするか、該当する答えを記入させた。統計処理については、各項目の頻度及び%を算出し、必要と思われる項目間については、クロス集計を行った。

- ②柔道に対する項目のうち柔道に対する態度尺度については、柔道の態度構造を明らかにするために、以下の手順で統計処理を行った。

- i) 態度質問紙の各項目は、「非常に感じる」から「全く感じない」までの4件法で回答を求め、それぞれに4点から1点の得点を与えた。

- ii) 態度に関する34の項目の評定値に対して、共通性のある主因子解による因子分析を施した。
 - iii) その結果、固有値1.0以上である因子を抽出した。
 - iv) 更に、得られた因子行列に対して、Normal・Varimax回転を施した。
 - v) 因子の解釈・命名については、因子負荷量0.4以上の項目を原則として有効とし、解釈可能な範囲で命名を行った。
 - vi) また、解釈・命名可能な因子については、因子平均得点を算出した。(因子の個人得点<以降態度尺度得点>=各因子に含まれる因子負荷量0.4以上の項目の評定得点の合計÷項目数)
 - vii) また、柔道をやらせたい群及びやらせたくない群、並びに柔道経験群及び未経験群間で、各態度尺度の平均得点を基にT-検定をおこなった。
- 以上、本研究におけるすべての計算処理は、spssプログラムによって行われた。

Ⅲ 結果と考察

1. 調査対象者の運動・スポーツに対する属性

調査対象者の運動習慣や運動歴などの一般項目の回答結果については、表1から表25に示した。その結果以下のような特徴が見いだされた。

①運動習慣

表2には、週当たりの対象者の運動頻度と体育授業頻度のクロス集計結果が示してある。それによると体育の授業以外で運動実践をしている割合は、全体149名に対して、24名(16.1%)と、非常に低いことが明かになった。

②スポーツ・運動に対する好嫌

表3には、対象者のスポーツや運動に対する好嫌度(プレイすることや観戦すること)を示した。その結果、91.9%の対象者が、運動・スポーツに対して好意的であることが示唆された。

③運動経験(クラブ活動)

小学校、中学校、高等学校での、対象者の運動クラブ活動経験を表4に示した。それによると、特に中学校期の運動クラブ活動の実践率が61.7%と高いこと、並びに中学校以上の運動クラブ経験者では、学校の運動クラブ活動への参加率がかなり高いことが明確になった。

尚、表8に示した結果から、少なくとも115名(77.2%)が、いずれかの学校期に運動クラブ活動を経験したこととなると同時に、115名全ての親が、運動クラブ活動を理解していたことが明かとなった。また、表9に示したように、運動クラブ開始動機については、やはり、「自分から興味があった・34.0%」、「好きだったから・10.0%」、「楽しいから・13.0%」などの内発的動機に因るところが大きい。更に、「重要な他者の影響が、スポーツ行動を規定する大きな要因であると言われている」¹⁷⁾とおり、「親や友人などの薦め・20.0%」、「廻りの人の影響・8.2%」などの解答が高い割合を示した。

ところで、各学校期のクラブ活動経験者の種目についてであるが、小学校期は表5に、中学校期は表6に、高等学校期は表7に記した。それによると、各学校期を通して球技種目を経験する割合が高いことが示された。しかしながら、小学校期においては、球技種目同様、水泳の経験率が28.6%と、かなり高いことも明かになった。その理由としては、表4に示されたように、小学校期の運動クラブ活動が、学校外のクラブ活動に委ねられている傾向があることに起因するのではないか。

④行いたい運動・スポーツ

表 1 年齢分布
Table 1 Age of subjects

項目	age	frequency	%	cum	%
年齢	18	63	42.3	42.3	
	19	43	28.9	71.1	
	20	17	11.4	82.6	
	21	7	4.7	87.2	
	22	5	3.4	90.6	
	23	4	2.7	93.3	
	24	4	2.7	96.0	
	25	3	2.0	98.0	
	28	1	0.7	98.7	
	29	1	0.7	99.3	
	31	1	0.7	100.0	
total		149	100.0		

表 3 スポーツ・運動の好嫌
(プレイをすることや観ることが好きか)
Table 3 Likes and dislikes in sports

項目	frequency	%	cum	%
はい	137	91.9	91.9	
いいえ	12	8.1	100.0	
total	149	100.0		

表 5 小学校運動経験者の各運動種目の割合
(3名無記入)

Table 5 The proportion of sports' experience in elementary school days

種目	frequency	%	cum	%
バレーボール	8	12.7	12.7	
テニス	3	4.8	17.5	
バスケ	8	12.7	30.2	
野球	1	1.6	31.7	
陸上	4	6.3	38.1	
バトミントン	5	7.9	46.0	
剣道	2	3.2	49.2	
水泳	18	28.6	77.8	
器械体操	3	4.8	82.5	
バレエ	1	1.6	84.1	
ソフトボール	1	1.6	85.7	
卓球	3	4.8	90.5	
新体操	2	3.2	93.7	
一輪車	2	3.2	96.8	
ドッチボール	2	3.2	100.0	
total	63	100.0		

表 2 体育の頻度と運動頻度のクロス集計
Table 2 Cross tabulation of the frequency of sports by the frequency of physical education class

		体育頻度				
		1回	2回	3回	計	%
運動頻度	1回	41			41	27.5
	2回	4	55		59	39.6
	3回	6	11	25	42	28.2
	4回	1	2	3	6	4.0
	5回	1			1	0.7
	計	53	68	28	149	
	%	35.6	45.6	18.8		100.0

表 4 運動経験(クラブ活動)

Table 4 Experience of sports

		場所			
		学校 クラブ	その他 クラブ	計	%
時期	小学校	23	43	66	44.3
	中学校	91	1	92	61.7
	高等学校	49	3	52	34.9

表 6 中学校運動経験者の各運動種目の割合

Table 6 The proportion of sports' experience in junior high school days

種目	frequency	%	cum	%
バレーボール	16	17.4	17.4	
テニス	20	21.7	39.1	
バスケ	16	17.4	56.5	
陸上	5	5.4	62.0	
柔道	1	1.1	63.0	
バドミントン	12	13.0	76.1	
剣道	1	1.1	77.2	
水泳	2	2.2	79.3	
器械体操	2	2.2	81.5	
ソフトボール	7	7.6	89.1	
卓球	6	6.5	95.7	
マラソン	1	1.1	96.7	
スキー	1	1.1	97.8	
ハンドボール	1	1.1	98.9	
小林寺	1	1.1	100.0	
total	92	100.0		

表7 高等学校運動経験者の各運動種目の割合
Table 7 The proportion of sports' experience
in high school days

種目	frequency	%	cum %
バレーボール	9	17.3	17.3
テニス	13	25.0	42.3
バスケ	8	15.4	57.7
陸上	3	5.8	63.5
ダンス	2	3.8	67.3
バドミントン	3	5.8	73.1
サッカー	1	1.9	75.0
剣道	1	1.9	76.9
水泳	4	7.7	84.6
ソフトボール	1	1.9	86.5
空手	1	1.9	88.5
スキー	1	1.9	90.4
ハンドボール	1	1.9	92.3
弓道	2	3.8	96.2
オリエンテーリング	1	1.9	98.1
バトン	1	1.9	100.0
total	92	100.0	

表9 運動クラブ活動を始めた理由
(5名無記入)

Table 9 The motivation of beginning sports

理由	frequency	%	cum %
好きだったから	11	10.0	10.0
人・親・友人に進められて	22	20.0	30.0
健康・美容のため	3	2.7	32.7
自分から興味があった	34	30.9	63.6
なんとなく	9	8.2	71.8
楽しいから	13	11.8	83.6
格好がよいから	2	1.8	85.5
みんなやっていたから	2	1.8	87.3
小さい頃から遊んでいた	1	0.9	88.2
まわりの人の影響	9	8.2	96.4
その他	4	3.6	100.0
total	110	100.0	

表8 運動クラブ活動経験者の親の理解
Table 8 Comprehension of parents
towards sports

項目	frequency	%	cum %
はい	115	100.0	100.0
いいえ	0	0	100.0
total	115	100.0	

※115名が小中高のいずれかの学校時代に運動クラブ活動の経験があることとなる

表10 行いたい運動・スポーツ
Table 10 The desirable sports to play
(subjects' self)

種目	frequency	%	cum %
バレーボール	3	2.0	2.0
テニス	21	14.1	16.1
バスケ	9	6.0	22.1
野球	2	1.3	23.5
陸上	1	0.7	24.2
柔道	2	1.3	25.5
ダンス	4	2.7	28.2
スノーボード	10	6.7	34.9
バドミントン	5	3.4	38.3
サッカー	5	3.4	41.6
ボディボード	1	0.7	42.3
サーフィン	3	2.0	44.3
剣道	1	0.7	45.0
水泳	24	16.1	61.1
器械体操	1	0.7	61.7
バレエ	1	0.7	62.4
ソフトボール	2	1.3	63.8
卓球	1	0.7	64.4
空手	1	0.7	65.1
スキューバダイビング	2	1.3	66.4
スカイダイビング	1	0.7	67.1
スキー	4	2.7	69.8
スカッシュ	1	0.7	70.5
ラクロス	4	2.7	73.2
スケート	2	1.3	74.5
ゴルフ	4	2.7	77.2
乗馬	1	0.7	77.9
水上バイク	1	0.7	78.6
特になし	32	21.5	100.0
total	149	100.0	

表10には、対象者の行いたい運動・スポーツ種目を示した。その結果、水泳(16.1%)、テニス(14.1%)、スノーボード(6.7%)などの種目に高い関心が示された。特に水泳については、平成8年に、余暇開発センターが実施した「スポーツライフに関する調査」²⁾においても、その実施順位が10代の女性が3位、20代、30代の女性が共に2位と非常に実践率の高い種目であると指摘されている。また、スノーボードなどは、現在の日本のスポーツにおける流行を示唆したものと考えられるが、いずれにしても生涯スポーツであることや健康に大きく寄与すること、更にファッション性に富んでいることなどが、対象者にとって重要であることには間違いない。

尚、28種目が行いたい運動・スポーツとして示されたが、運動・スポーツにおいても、そのニーズの多様性を認めざるを得ない。

⑤対象者の運動に対する自己有能感

対象者の運動に対する自己の有能感を測定する目的から、「運動に対する自信」「運動神経の有無感」「体力の有無感」「運動に対する統制感」の4項目を設け、「非常に感じる」から、「全く感じない」までの4件法で解答を求めた。(表11から表14を参照)

その結果、「運動に対する自信」があると答えた者は、40.9%(感じる、非常に感じるの累積)、「運動神経」が良いと答えた者は、32.8%(感じる、非常に感じるの累積)、「体力」があると答えた者は、45.0%(感じる、非常に感じるの累積)であった。これらの項目は、伊藤⁶⁾が示した「身体的有能さ」尺度を構成する項目でもある。従って、この結果だけで鑑みれば、対象者が、自己の身体的能力をあまり高く評価していないこととなる。しかしながら、日本女性は特に、社会的承認傾向が強いために自己を直接的に高く評価することを避けるといっても言われており、本研究の対象者が、運動に対する適当な自己有能感を有していないと、すぐに結論付けることには難があるように思われる。

ところで、「どんな運動・スポーツでも努力すればできるようになりますか」との問いに対し、肯定的な解答(感じる、非常に感じるの累積)は、81.2%とかなり高い値が得られた。この項目

表11 運動に対する自信

Table 11 The confidence to sports

項目	frequency	%	cum %
全く感じない	22	14.8	14.8
感じない	66	44.3	59.1
感じる	58	38.9	98.0
非常に感じる	3	2.0	100.0
total	149	100.0	

表12 運動神経の有無感

Table 12 The ability of exercise (be or not)

項目	frequency	%	cum %
全く感じない	25	16.8	16.8
感じない	75	50.3	67.1
感じる	47	31.5	98.7
非常に感じる	2	1.3	100.0
total	149	100.0	

表13 運動に対する統制感

Table 13 The expectancy to sports

項目	frequency	%	cum %
全く感じない	4	2.7	27.7
感じない	24	16.1	18.8
感じる	104	69.8	88.6
非常に感じる	17	11.4	100.0
total	149	100.0	

表14 体力の有無感

Table 14 The physical strength of subjects (be or not)

項目	frequency	%	cum %
全く感じない	17	11.4	11.7
感じない	65	43.6	55.0
感じる	60	40.3	95.3
非常に感じる	7	4.7	100.0
total	149	100.0	

は、まさに伊藤の尺度でいうならば「運動に対する統制感」を代表する項目である。デシ³⁾も「努力によって環境をコントロールできる認知が高いことは、内発的動機が高い」と示唆しているように、本研究対象者が、上述した結果とは裏腹に、運動・スポーツに対して、望ましい効力感を有しているということが言えるのではないか。

以上の見解は、共に逆説的であると考えられるが、対象者の集団が、現段階でチャンピオンシップを狙ういわゆるトップアスリートの集団でないことや、女性の社会是認的な傾向の強さなどを考慮すれば、本調査対象者が、運動・スポーツに対して健全な自己有能感を有していると言っても問題はないであろう。

尚、表15には、スポーツ・運動に関する賞賛経験の有無を示したが、「ある・47.0%」「ない・

表15 スポーツ・運動に対する賞賛経験

Table 15 The experience of applause to sports

項目	frequency	%	cum %
ある	70	47.0	47.0
ない	77	51.7	98.7
無回答	2	1.3	100.0
total	149	100.0	

表16 将来の配偶者に対する期待感

(運動が得意なほうがよいか)

Table 16 The expectation to subjects' husband

項目	frequency	%	cum %
はい	114	96.6	96.6
いいえ	4	2.7	97.3
無回答	1	0.7	100.0
total	149	100.0	

表17 子供に行わせたいスポーツ種目

(男子の場合・無回答2名)

Table 17 The desirable sports
(to subjects' boy)

項目	frequency	%	cum %
バレーボール	2	1.4	1.4
テニス	1	0.7	2.0
バスケット	10	6.8	8.8
野球	37	25.2	34.0
陸上	3	2.0	36.1
柔道	2	1.4	37.4
ダンス	1	0.7	38.1
サッカー	56	38.1	76.2
剣道	5	3.4	79.6
水泳	20	13.6	93.2
器械体操	1	0.7	93.9
マラソン	1	0.7	94.6
スキー	3	2.0	96.6
スケート	1	0.7	97.3
ドッジボール	1	0.7	98.0
特になし	3	2.0	100.0
total	147	100.0	

表18 子供に行わせたいスポーツ種目

(女子の場合・無回答10名)

Table 18 The desirable sports
(to subjects' girl)

項目	frequency	%	cum %
バレーボール	16	11.5	11.5
テニス	28	20.1	31.7
バスケット	12	8.6	40.3
陸上	4	2.9	43.2
ダンス	4	2.9	46.0
バドミントン	3	2.2	48.2
サッカー	1	0.7	48.9
剣道	2	1.4	50.4
水泳	36	25.9	76.3
器械体操	4	2.9	79.1
バレエ	13	9.4	88.5
ソフトボール	2	1.4	89.9
新体操	2	1.4	91.4
空手	1	0.7	92.1
スキー	2	1.4	93.5
ハンドボール	1	0.7	94.2
ラクロス	1	0.7	94.9
スケート	1	0.7	95.6
なぎなた	1	0.7	96.3
ドッジボール	1	0.7	97.0
バトン	1	0.7	97.8
特になし	3	2.2	100.0
total	139	100.0	

51.7%」とはほぼ同じ割合であることが明らかになった。教員やコーチなどの努力教示⁵⁾や賞賛⁷⁾が、生徒や選手の内的な動機を高くさせ、延いては、運動やスポーツに対する自己有能感を高くさせるということを考慮すれば、この結果は決して望ましいとは言えない。即ち調査対象者の世代も、スポーツ根性論は当たり前といった、以前の間違った風潮を完全に拭い去ることができなかったということを示唆していよう。しかしながら、それにもまして、本調査対象者が、運動・スポーツに対して健全な自己有能感を有していることは、表8の結果が示すように親の理解(支援)があったことも大きな一因であろう。

⑥自身の子供や配偶者への運動参加の適否

表17(男子の場合)、表18(女子の場合)には、子供に行わせたいスポーツ種目を示した。それによると、男子には、サッカー(38.1%)、野球(25.2%)、水泳(13.6%)、女子には、水泳(25.9%)、テニス(20.1%)、バレーボール(11.5%)等の種目を行わせたいことが明らかになった。また、無回答(スポーツを行わせる必要のない場合は記入しなくてもよい)についても、男子の場合2名、女子の場合10名とかなり少数であり、殆どの対象者が、将来自分の子供に、何かスポーツをやらせたいと感じていることが明確になった。

尚、その理由については表19に示したが、要約すれば以下の様になる。

- i) 「健康のため・8.8%」「体を鍛えさせたい・10.3%」「心身ともに鍛えさせたい・6.6%」「よい発育発達のため・4.4%」等の心身の健康向上への期待感。

- ii) 「楽しいから・5.9%」「好きだから・4.4%」「体を動かす楽しさを知って欲しい・6.6%」「できたほうがよい・6.6%」等のスポーツの本質的な楽しさを子供にも理解して欲しいという気持ち。

- iii) 「忍耐力の育成・3.7%」「グループ活動に慣れる・5.9%」「得意なものを身につけさせたい・3.7%」等、健康以外にスポーツを通して得ることができるとの事柄への期待感。

- iv) 「格好が良い・8.8%」「体形をよくする・3.7%」など、スポーツの持つファッション性への憧れ感。

また、将来の配偶者に対する期待感については、表16に示した。「将来の配偶者は、運動が得意なほうがよいか」との問いに対し、「はい」と答えた対象者は、96.6%とかなり高い

表19 子供に行わせたいスポーツ種目を選んだ理由
(無回答13名)

Table 19 The reason of selection (See [Cf.] table 17,18)

項目	frequency	%	cum %
忍耐力の育成	5	3.7	3.7
体力の向上	1	0.7	4.4
できたほうがよい	9	6.6	11.0
性差をきわだたさせる	4	2.9	14.0
よい発育発達のため	6	4.4	18.4
グループ活動に慣れる	8	5.9	24.3
楽しいから	8	5.9	30.1
格好が良い	12	8.8	39.0
自分でやっていた	6	4.4	43.4
その競技を見るのが好き	1	0.7	44.1
自分がやりたかった	5	3.7	47.8
好きだから	6	4.4	52.2
有名になってほしい	1	0.7	52.9
体形をよくする	5	3.7	56.6
早いほうがよい	1	0.7	57.4
体を動かす楽しさを知って欲しい	9	6.6	64.0
続けることの大切さを知らせたい	1	0.7	64.7
健康のため	12	8.8	73.5
体を鍛えさせるため	14	10.3	83.8
いろいろな経験をさせたい	1	0.7	84.6
自分が苦手だった	1	0.7	85.3
何か運動させたい	4	2.9	88.2
心身ともに鍛えさせたい	9	6.6	94.8
礼儀を教えたい	2	1.5	96.3
得意なものを身につけさせたい	5	3.7	100.0
total	136	100.0	

表20 小学校での体育の必要性
Table 20 Necessity of physical education
in elementary school days

項目	frequency	%	cum %
はい	149	100.0	100.0
いいえ	0	0.0	100.0
total	149	100.0	

表22 高等学校での体育の必要性
Table 22 Necessity of physical education
in high school days

項目	frequency	%	cum %
はい	134	89.9	89.9
いいえ	15	10.1	100.0
total	149	100.0	

表21 中学校での体育の必要性
Table 21 Necessity of physical education
in junior high school days

項目	frequency	%	cum %
はい	114	96.6	96.6
いいえ	5	3.4	100.0
total	149	100.0	

表23 大学や専門学校での体育の必要性
(無回答 1名)
Table 23 Necessity of physical education
in university days

項目	frequency	%	cum %
はい	110	74.3	74.3
いいえ	38	25.7	100.0
total	148	100.0	

割合を示している。女性の配偶者選びの条件が、3高（高学歴、高収入、高身長）等と言われて久しいが、それと同様に、若い女性が、その配偶者のスポーツ・運動実践能力に対して、高い期待感を抱いていることは本当に興味深いことである。

⑦体育の必要性

表20から表23には、小学校、中学校、高等学校、大学及び専門学校での体育の必要性について、「はい」「いいえ」の2件法で解答を求めた結果を示してある。小学校で「はい」と答えた者は100.0%、中学校・96.9%、高等学校・89.9%、大学や専門学校・74.3%であった。対象者が、専門学校生であり現行の体育カリキュラムに対して、何らかの不満を抱いている可能性からか、大学や専門学校での体育の必要性に対して「はい」と解答した割合が下がったものの、概ねどの時期での学校体育についても必要であると認識していることが明かにされた。

⑧日本の代表スポーツ

「現在日本を代表するスポーツはどのような種目を連想しますか」という問いに対する結果を表24に示した。また、その理由については、表25に示した。

それによると、日本を代表するスポーツの上位5種目は、「柔道・30.6%」「サッカー・25.9%」「相撲・21.8%」「野球・8.8%」「スキー・2.7%」である。また、以上の種目と、種目選択理由についてクロス集計した結果を要約すると以下の如くである。

i) 柔道を選択した対象者の中には、「日本的・20.0%」「伝統がある・20.0%」「国技・11.1%」「日本で始まった・6.7%」(計57.8%)のように、柔道を日本の伝統的な運動として捉える者、「日本が勝つ・33.3%」というように、世界での競技力の優位性を上げる者、「テレビで良く見る・6.7%」などのメディア性から柔道を選択した者、並びに「運動構造上・2.2%」の理由から選択した者に大別された。

ii) 相撲については、「国技・48.4%」「日本的・22.6%」「伝統がある・9.7%」「日本で始まった・9.7%」(計90.4%)などのように、相撲を柔道同様に日本の伝統的な運動と認知したが故に、代表的な運動とした者と、「テレビで良く見る・9.7%」のメディア性から選択した者に二分された。

表24 日本の代表的スポーツ
(無回答2名)Table 24 The Japanese sports which
subjects selected

種目	frequency	%	cum %
バレーボール	2	1.4	1.4
野球	13	8.8	10.2
陸上	1	0.7	10.9
柔道	45	30.6	41.5
サッカー	38	25.9	67.3
相撲	32	21.8	89.1
剣道	1	0.7	89.8
水泳	2	1.4	91.2
マラソン	3	2.0	93.2
スキー	4	2.7	95.9
弓道	1	0.7	96.6
ジャンプ	1	0.7	97.3
合気道	1	0.7	98.0
スケート	3	2.0	100.0
total	147	100.0	

表25 日本の代表的スポーツを選択した理由
(無回答6名)Table 25. The reason of selection
(See [Cf.] table24.)

項目	frequency	%	cum %
テレビで良く見る	28	19.6	19.6
長野オリンピックで活躍した	8	5.6	25.2
ワールドカップがある	28	19.6	44.8
日本的	18	12.6	57.3
伝統がある	12	8.4	65.7
国技	20	14.0	79.7
日本が勝つ	16	11.2	90.9
日本で始まった	6	4.2	95.1
運動構造上	6	4.2	99.3
なんとなく	1	0.7	100.0
total	143	100.0	

iii) サッカーについては、「ワールドカップがある・74.3%」「テレビで良く見る・17.1%」(計91.4%)の理由で9割以上を占めているが、正に、ワールドカップ開催の時期と重なったこと、並びにマス＝メディアが、ワールドカップを大いに取り上げた結果が反映したものと考えられる。

iv) 野球でも、「テレビで良く見る・84.6%」が、選択理由のトップであり、メディア性に因るところが大きい。

v) スキーでは、スキー選択者全員が「長野オリンピックで活躍した」を理由とした。モーグルで優勝者が出るなど、競技力の優位性が認知されたことが大きな要因であろうが、国内でのオリンピックであり、テレビをつければ、オリンピックの競技が見られる状況も一因となったことに異論はあるまい。

以上を概観すると、①運動の本質、②競技力、③マス＝メディアの影響等によって、対象者が各スポーツ種目を選択していることが明かになった。特に、スポーツの普及・発展を考える場合、本調査結果が示す如く、マス＝メディアの影響力を見逃すことはできない。

2. 調査対象者の柔道に対する態度構造

Varimax 回転後の抽出因子及び因子負荷量を表31に示した。この結果、解釈・命名可能な因子は、8因子であった。(回転後の貢献度の合計は、全分散の62.0%であった。・表30, 因子の解釈・命名における因子負荷量の基準は、0.4以上とした)

(1) 第一因子に負荷量の大きな項目は10項目であった。この項目のうち「力がつく」「持久力がつく」「体が柔らかくなる」「平衡性が向上する」「動きが素早くなる」の5項目は全て、柔道を通した身体の鍛錬効果を示している。また、「忍耐力がつく」「積極的になる」「協力的になる」「正義感が強くなる」などの項目は、柔道を通した精神への鍛錬効果を表している。以上からこの因子を、心身鍛錬因子と解釈・命名した。

(2) 第二因子については、「子供の躰によい」という項目の他、「決断力がつく」「積極的になる」「責任感がます」「気持ち落ち着く」「人を大事にする気持ちが生まれる」「明るくなる」というように、徳性の涵養に柔道が寄与するという観点から解釈される。従って、この因子を徳性涵養因子と命名した。

(3) 第三因子に含まれる項目は、「危険」「怖い」「痛い」「苦しい」など、柔道に対する逃避的な感情を表している。よってこの因子を逃避的感情因子と命名した。

(4) 第四因子については、「明るい」「楽しい」「さわやか」「近代的な」「はなやか」など、柔道を肯定する感情を表す項目から構成されていることにより、肯定的感情因子と解釈・命名した。

(5) 第五因子に含まれる項目は、「古い」「暗い」「孤独」というように柔道を否定する感情を表す項目から構成されている。従ってこの因子は、否定的感情因子と命名した。

(6) 第六因子は、柔道が「日本の伝統文化として重要」であり、「躰」「礼儀」「正義」などを涵養するために有効であることを示している。そこで、この因子は、日本的礼節涵養因子と解釈・命名した。

(7) 第七因子は、「男性的」という項目が示すとおり、男性視的認知因子と命名した。

(8) 第八因子は、「日本の伝統的文化として重要」及び「難しい」という2項目から構成され

表26 学校体育での柔道学習希望

Table 26 The proportion of subjects who would like their children to study judo in class

項目	frequency	%	cum %
はい	56	37.6	37.6
いいえ	93	62.4	100.0
total	148	100.0	

表28 学校体育での柔道経験者

Table 28 The proportion of subjects who experienced judo in physical education

項目	frequency	%	cum %
はい	13	8.7	8.7
いいえ	136	91.3	100.0
total	149	100.0	

表30 相関行列の固有値

Table 30. Eigenvalue of rotated factor matrix

因子	固有値	貢献度 (%)	累積貢献度 (%)
1	7.26569	21.4	21.4
2	4.48486	13.2	34.6
3	2.23247	6.6	41.1
4	1.86771	5.5	46.6
5	1.57647	4.6	51.3
6	1.30223	3.8	55.1
7	1.24438	3.7	58.7
8	1.10393	3.2	62.0

表27 クラブ活動・社会体育などでの柔道修行希望

Table 27 The proportion of subjects who would like their children to practice judo except class

項目	frequency	%	cum %
はい	23	15.4	15.4
いいえ	126	84.6	100.0
total	149	100.0	

表29 クラブ活動・社会体育などでの柔道経験者

Table 29. The proportion of subjects who experienced judo except physical education

項目	frequency	%	cum %
はい	1	0.7	0.7
いいえ	148	99.3	100.0
total	149	100.0	

表31 態度に関する因子分析結果

Table 31 Rotated factor loading and naming of factors (attitude towards judo)

因子	項目	因子負荷量
F1: 心身鍛練因子	V14・力がつく	0.54857
	V15・持久力がつく	0.63041
	V16・体が柔らかくなる	0.58246
	V17・平衡性が向上する	0.73660
	V18・動きが素早くなる	0.54560
	V20・健康になる	0.63097
	V25・忍耐力がつく	0.62116
	V26・積極的になる	0.57990
	V27・協力的になる	0.44270
	V30・正義感が強くなる	0.44412
F2: 徳性涵養因子	V19・プロポーションがよくなる	0.68020
	V23・子どものしつけによい	0.51321
	V24・決断力がつく	0.49811
	V26・積極的になる	0.46805
	V27・協力的になる	0.54709
	V28・責任感がます	0.57760
	V31・気持ちが落ち着く	0.49335
	V32・人を大事にする気持ちが強くなる	0.65874
V33・明るくなる	0.71131	
F3: 逃避的感情因子	V6・危険な感じがする	0.72907
	V7・怖い感じがする	0.84699
	V8・痛い感じがする	0.77353
	V10・苦しい感じがする	0.57123
F4: 肯定的感情因子	V1・明るい感じがする	0.42893
	V2・楽しい感じがする	0.56357
	V3・さわやかな感じがする	0.65336
	V4・近代的な感じがする	0.74534
	V5・華やかな感じがする	0.81770
F5: 否定的感情因子	V11・暗い感じがする	0.77162
	V12・古くさい感じがする	0.77167
	V13・孤独な感じがする	0.72963
F6: 日本の礼節涵養因子	V21・日本の伝統文化として重要である	0.42180
	V23・子供のしつけによい	0.44868
	V24・決断力がつく	0.46004
	V29・礼儀正しくなる	0.72878
	V30・正義感が強くなる	0.56250
F7: 男性視的認知因子	V9・男性的な感じがする	0.79575
	V14・力がつく	0.54520
F8: 特異視因子	V21・日本の伝統文化として重要である	0.53763
	V22・難しい	0.74160

*因子負荷量0.4以上の項目を因子の解釈に採用した

表32 態度尺度の平均得点

Table 32 Factor mean score and standard deviation
(attitude toward judo)

因子名	平均得点	S.D.
F1: 心身鍛練因子	2.89	0.49
F2: 徳性涵養因子	2.25	0.48
F3: 逃避的感情因子	3.09	0.56
F4: 肯定的感情因子	1.92	0.45
F5: 否定的感情因子	2.31	0.64
F6: 日本の礼節涵養因子	2.77	0.53
F7: 男性視的認知因子	3.39	0.59
F8: 特異視因子	3.19	0.55

表33 柔道希望群 (n=56) と非希望群 (n=93) の
態度尺度得点及び群間の有意差検定 (学習)Table 33 Factor mean score, standard, deviation, and t-test
(between desirable group and not desirable group)

因子名	希望群		非希望群		t-test
	平均得点	S.D.	平均得点	S.D.	
F1: 心身鍛練因子	3.05	0.49	2.83	0.48	P<0.05
F2: 徳性涵養因子	2.43	0.48	2.14	0.45	P<0.001
F3: 逃避的感情因子	2.97	0.59	3.17	0.54	P<0.05
F4: 肯定的感情因子	2.04	0.41	1.85	0.46	P<0.01
F5: 否定的感情因子	2.18	0.55	2.38	0.67	
F6: 日本の礼節涵養因子	2.97	0.48	2.65	0.53	P<0.001
F7: 男性視的認知因子	3.38	0.59	3.40	0.60	
F8: 特異視因子	3.39	0.50	3.06	0.55	P<0.001

表34 柔道経験群 (n=13) と非経験群 (n=136) の
態度尺度得点及び群間の有意差検定 (授業)Table 34 Factor mean score, standard, deviation, and t-test
(between experienced group and not experienced group)

因子名	希望群		非希望群		t-test
	平均得点	S.D.	平均得点	S.D.	
F1: 心身鍛練因子	2.98	0.76	2.89	0.46	
F2: 徳性涵養因子	2.38	0.60	2.24	0.47	
F3: 逃避的感情因子	3.04	0.66	3.10	0.57	
F4: 肯定的感情因子	1.94	0.45	1.91	0.45	
F5: 否定的感情因子	2.56	0.80	2.29	0.62	
F6: 日本の礼節涵養因子	2.91	0.80	2.76	0.51	
F7: 男性視的認知因子	3.19	0.88	3.41	0.56	
F8: 特異視因子	3.38	0.46	3.17	0.56	

このアンケートは、運動・スポーツについて、また特に柔道について、皆さんの意見をお聞きするために実施するものです。各質問では、適当と思われる項目番号に○印をするか、該当する答えをご記入下さい。

尚、調査結果につきましては、講道館研究紀要に発表させて頂きたいと存じます。従って、信頼できる結果になりますように、心からご協力の程宜しくお願い致します。

1. 性別 1. 男 2. 女
2. 年齢 1. 18歳 2. 19歳 3. 20歳 4. その他 () 歳
3. 現在あなたは、運動を週何回くらい行っていますか。体育の授業も含まれます。
 1. 週 1 回 2. 週 2 回 3. 週 3 回 4. 週 4 回
 5. 週 5 回以上
4. 以上の内体育の授業は週何回ですか。
 1. 週 1 回 2. 週 2 回 3. 週 3 回 4. 週 4 回
5. 体育の授業以外でどんな運動を行っていますか。いくつ記入しても結構です。

例 (テニス) 回答欄 ()
6. 今までの学校体育 (小学校、中学校、高校) で、面白かった種目はどんなものですか。

例 (水泳) 回答欄 ()
7. 今までの学校生活及び学校外でクラブ活動や運動・スポーツを特別に行っていましたか。
 1. はい 2. いいえ
8. a) 「はい」と答えてくれた方にお聞きします。
 1. いつですか 2. どこですか 3. 何ですか 4. どのくらい続けましたか

例 1 (中学校) 2 (学校クラブ活動) 3 (バレーボール) 4 (3 年)

 1 () 2 () 3 () 4 ()

 1 () 2 () 3 () 4 ()

 1 () 2 () 3 () 4 ()

 1 () 2 () 3 () 4 ()

 1 () 2 () 3 () 4 ()

 1 () 2 () 3 () 4 ()
- b) 上記に記入して戴いた運動を始めるきっかけはどのようなものだったでしょうか。

()
- c) 上記の運動を行っていた時、あなたのご両親は理解をしてくれましたか。
 1. はい 2. いいえ
9. 小学校で体育は必要と感じますか。
 1. はい 2. いいえ
10. 中学校で体育は必要と感じますか。
 1. はい 2. いいえ
11. 高校で体育は必要と感じますか。
 1. はい 2. いいえ
12. 大学や専門学校などでも体育は必要と感じますか。
 1. はい 2. いいえ
13. 将来、あなたの子供に、どんな運動・スポーツを行わせたいですか。もし、子供には運動やスポーツは、必要ないと思われる方は、記入しなくても結構です。
 - a) 男子の場合例 (サッカー) 回答欄 ()
 - b) 女子の場合 回答欄 ()
14. それはどんな理由ですか、簡単に説明して下さい。

()
15. 将来あなたは、あなたの子供に、学校体育の中で柔道を学習させたいと思いますか。
 1. はい 2. いいえ
16. 将来あなたは、あなたの子供に、クラブ活動や社会体育などで柔道をさせたいですか。
 1. はい 2. いいえ

17. 現在日本を代表する運動・スポーツといえばどのような種目を連想しますか。
()
18. どうしてそのように感じますか。簡単に理由を説明して下さい。
()
19. あなた自身、運動やスポーツ（プレイをすること、見ることを含む）は好きですか。
1. はい 2. いいえ
20. あなたが、今後行いたい運動やスポーツがあればお聞かせ下さい。
()
21. あなたの結婚相手は、運動やスポーツを行うことが得意な人のほうがいいですか。
1. はい 2. いいえ
22. あなたのご両親は、スポーツや運動に関心がありますか。
1. はい 2. いいえ
23. あなたは、運動・スポーツについて自信がありますか。
4. 非常にある 3. ある 2. あまりない 3. 全くない。
24. あなたは、運動神経がよいと思いますか。
4. 非常に感じる 3. 感じる 2. 感じない 4. 全く感じない
25. どんな運動・スポーツでも努力すればできるようになると思いますか。
4. 非常に感じる 3. 感じる 2. 感じない 4. 全く感じない
26. あなたは、体力があると感じますか。
4. 非常に感じる 3. 感じる 2. 感じない 4. 全く感じない
27. あなたは、今までで運動やスポーツの成績や結果を賞賛されたことはありますか。
1. はい 2. いいえ
28. 以下については、柔道についての設問です。

非 感 感 全
常 じ じ く
に る な 感
感 い じ
じ な
る い

- | | | | | | | | |
|--------------------------|---|---|---|---|---|---|---|
| 1. 明るい..... | 4 | - | 3 | - | 2 | - | 1 |
| 2. 楽しい..... | 4 | - | 3 | - | 2 | - | 1 |
| 3. さわやか..... | 4 | - | 3 | - | 2 | - | 1 |
| 4. 近代的..... | 4 | - | 3 | - | 2 | - | 1 |
| 5. 華やか..... | 4 | - | 3 | - | 2 | - | 1 |
| 6. 危険な..... | 4 | - | 3 | - | 2 | - | 1 |
| 7. 怖い..... | 4 | - | 3 | - | 2 | - | 1 |
| 8. 痛い..... | 4 | - | 3 | - | 2 | - | 1 |
| 9. 男性的..... | 4 | - | 3 | - | 2 | - | 1 |
| 10. 苦しい..... | 4 | - | 3 | - | 2 | - | 1 |
| 11. 暗い..... | 4 | - | 3 | - | 2 | - | 1 |
| 12. 古くさい..... | 4 | - | 3 | - | 2 | - | 1 |
| 13. 孤独..... | 4 | - | 3 | - | 2 | - | 1 |
| 14. 力がつく..... | 4 | - | 3 | - | 2 | - | 1 |
| 15. 持久力がつく..... | 4 | - | 3 | - | 2 | - | 1 |
| 16. 体が柔らかくなる..... | 4 | - | 3 | - | 2 | - | 1 |
| 17. 平衡性が向上する..... | 4 | - | 3 | - | 2 | - | 1 |
| 18. 動きが素早くなる..... | 4 | - | 3 | - | 2 | - | 1 |
| 19. プロポーションがよくなる..... | 4 | - | 3 | - | 2 | - | 1 |
| 20. 健康になる..... | 4 | - | 3 | - | 2 | - | 1 |
| 21. 日本の伝統文化として重要である..... | 4 | - | 3 | - | 2 | - | 1 |

	非 常 に 感 じ る	感 じ る	感 じ な い	全 く 感 じ な い
22. 難しい.....	4	3	2	1
23. 子どものしつけによい.....	4	3	2	1
24. 決断力がつく.....	4	3	2	1
25. 忍耐力がつく.....	4	3	2	1
26. 積極的になる.....	4	3	2	1
27. 協力的になる.....	4	3	2	1
28. 責任感がます.....	4	3	2	1
29. 礼儀正しくなる.....	4	3	2	1
30. 正義感が強くなる.....	4	3	2	1
31. 気持ちが落ち着く.....	4	3	2	1
32. 人を大事にする気持ちが強くなる.....	4	3	2	1
33. 明るくなる.....	4	3	2	1
34. 乱暴になる.....	4	3	2	1

29. あなたは、今までに体育で柔道を経験しましたか

1. はい 2. いいえ

30. あなたは、今までに体育以外で柔道を経験したことがありますか

1. はい 2. いいえ

ている。すなわち柔道自身が、他のスポーツと比較して、日本独自の文化性を有するとともに、難しいと解釈されていることを物語っている。言うなれば柔道の特異視する立場からの解釈になろう。従って、この因子は特異視因子と命名した。

以上 8 因子が解釈・命名されたが、本調査対象者が、高橋ら¹³⁾、矢野ら¹⁵⁾の先行研究対象者と、ほぼ同様な因子構造を有していることが明らかになった。尚、次項では、因子得点から更なる考察を加えたい。

3. 対象者の柔道に対する態度の評価

表32には、対象者の抽出因子の平均得点及び標準偏差を示してある。その結果を要約すれば以下の如くである。

- ①柔道が、精神や身体に及ぼす効果である認知的側面に対しては、その評価が高いことが認められた。
- ②柔道を通じた日本的な嫉感が、高く評価されていることが認められた。
- ③感情的には、非好意的・逃避的傾向にあるが、柔道自身を否定するものではない。
- ④柔道を男性的な運動と捉えるとともに、特殊な、いわば女性にとっては難しい運動として認知されていることが明らかにされた。

①及び③については、高橋ら¹³⁾や矢野¹⁵⁾らの研究をほぼ支持する結果となった。また、表28(学校体育での柔道経験の有無)、及び表29(クラブ活動・社会体育などでの柔道修行経験)の結果が示す様に、調査対象者の柔道経験率が非常に低いことが、④の結果に反映していると考えられる。

しかしながら、本調査対象者は、中学校、高等学校の保健体育で武道を選択することが可能な世代である(高等学校・中学校学習指導要領改訂平成元年3月15日、中学校では、平成5年、高等学校では平成6年実施)。このことは、学校体育において武道が男女共修になったにも拘わらず、現実的には実施が難しいということを示唆しているように、本研究の究極的な目的である、「柔道の更なる普及・発展」を考えると等閑にはできない。勿論、指導者不足などの大きな問題であろうが、女子への指導実態とその問題について調査研究していくことも急務であろう。

ところで、表26には、対象者の子供に対する学校体育での柔道学習希望を示してある。希望すると答えた対象者は、37.6%(クラブ活動・社会体育での柔道修行希望は15.4%・表27参照)と決して多いとは言えないが、対象者の学校体育での経験率8.7%を遥かに上回っている。以上の結果は、対象者自身が子供への教育に対して、柔道に期待する何かを有していることを物語っているのではないか。そして、それは上述した②を支持するかもしれない。

そこで、学校体育の場面に限って、柔道希望群と非希望群、並びに柔道経験群と未経験群間で、各態度尺度得点の有意差検定(t-test)を行った(表33, 34参照)。

その結果、柔道希望群と非希望群間では、否定的感情因子及び男性視的認知因子の得点を除くすべての因子で、統計的有意差が認められ、表33が示すように柔道希望群のほうが非希望群に比較して、柔道に対して好意的であることが明確となった。特に、徳性の涵養因子や日本の礼節の涵養因子は、両群間の有意差が0.1%水準であった。この結果は、「柔道に期待する何かの答え」であるとともに、上述した②を如実に示している。

ところで「子供に対する嫉」について、この時期の女性が、しっかりとした認識を持ち、柔道の学習に期待感を抱いているということは、将来の柔道を占う意味では実に頼もしい限りである。

以上既述のような結果を得た。その中で運動・スポーツに好意を示し、そのニーズも多様であ

る青年中期の女性が、柔道を日本を代表する運動として捉えている傾向が強いことを始めとして、柔道に対して良好な態度を有していることが理解された。特に、柔道の持つ効果的な側面については、高く評価をしていることが示された。と同時に、柔道の学習に期待感を抱いていることも明確になった。少年の犯罪が増加する一方で、学校教育も岐路に立たされているのは周知の通りであろうが、そのような社会情勢が、青年中期の女性達にも、教育の何が重要なのかを再認識させているのかもしれない。また、この時期の女性は、マス＝メディアの影響から、運動やスポーツの価値を認識する傾向が強いということも明らかになった。柔道への期待感を持っている女性に対して、あるいは持ち合わせていない女性達に、メディアを通して、柔道の教育性を訴えていくことの重要性も感じずにはいられない。

いずれにしても今後は、各年代の女性に対して同様な調査を試みるなど、更なるデータの蓄積が必要となろう。

VI まとめ

本研究は、次世代の母親予備軍とも言える青年期女子の柔道に対する態度や価値意識、あるいは、運動経験や運動に対する有能感などといった諸意識、あるいは、その要因間の因果関係を明らかにすることを目的として研究を進めてきた。その結果を要約すれば次ぎの如くである。

(1) 対象者は、スポーツ・運動に対して好意的であることが示唆された。

(2) 対象者のうち115名(77.2%)が、いずれかの学校期に運動クラブ活動を経験していた。特に中学校期での運動クラブ参加率が高いことも明らかになった。尚、参加動機は、「楽しい」「興味があった」など内的な動機、及び重要な他者(親、友人)の影響が強いことが認められた。また、各学校期を通して球技種目を経験する割合が高いことが示された。

(3) 対象者は、水泳、テニス、スノーボードなどに高い関心を示しているが、そのニーズは多種・多様であることが明らかにされた。

(4) 対象者は、運動・スポーツに対して健全な自己有能感を有していた。

(5) 対象者は、自分の子供や配偶者に対して、運動・スポーツを奨励する態度を有していることが明確となった。

(6) 対象者は、概ねどの時期での学校体育についても、必要であると認識していることが明らかにされた。

(7) 日本を代表するスポーツの上位5位は、「柔道」「サッカー」「相撲」「野球」「スキー」という結果が見いだされた。また、運動の本質、競技力、マス＝メディアの影響等によって、対象者が各スポーツを選択していることが認められた。

(8) Varimax回転後の解釈・命名可能な因子は、8因子であった。(心身鍛練因子、徳性涵養因子、逃避的感情因子、肯定的感情因子、否定的感情因子、日本の礼節涵養因子、男性視的認知因子、特異視因子)

(9) 対象者の抽出因子の平均得点及び標準偏差から、以下のような傾向が認められた。

①柔道が、精神や身体に及ぼす効果である認知的側面に対しては、その評価が高いことが認められた。

②柔道を通した日本的な躰感が、高く評価されていることが認められた。

③感情的には、非好意的・逃避的傾向にあるが、柔道自身を否定するものではない。

④柔道を男性的な運動と捉えるとともに、特殊な、いわば女性にとっては難しい運動として認知されていることが明らかにされた。

(10)柔道希望群と非希望群間では、否定的感情因子及び男性視的認知因子の得点を除くすべての因子で、統計的な有意差が認められた。更に柔道希望群のほうが非希望群に比較して、柔道に対して好意的であることが明確となった。

参考文献

- 1) バーナード, ワイナー著, 林 保, 宮本美沙子監訳: ヒューマンモチベーション——動機付けの心理学——, 金子書房, 330, 1989.
- 2) 江田昌佑監修, 余暇開発センター編集: スポーツライフ白書 する 観る 視る 読む 支える 話す, ぎょうせい, 152, 1998.
- 3) E. L. デシ著, 安藤延男, 石田梅男訳: 内発的動機付け, 誠心書房, 357, 1980.
- 4) 原岡一馬: 態度変容の心理学, 金子書房, 423, 1969.
- 5) 伊藤豊彦: 帰属教示が運動パフォーマンスに及ぼす影響について, 体育学研究, 28-4, 299, 308, 1984.
- 6) 伊藤豊彦: 原因帰属様式と身体的有能さの認知がスポーツ行動に及ぼす影響, 体育学研究, 31-4, 263, 271, 1987.
- 7) 宮本美沙子: 達成動機の心理学, 金子書房, 18-30, 1984.
- 8) 文部省: 中学校指導書——保健体育編——, 大日本図書, 126, 1989.
- 9) 文部省: 高等学校学習指導要領解説——保健体育編 体育編——, 東山書房, 155, 1989.
- 10) 尾形敬史: 柔道に対する意識の研究(第二報)——高校生を対象として——, 柔道, 51-5, 60-66, 1980.
- 11) 高橋 進, 貝瀬輝夫, 矢野勝: 柔道における高校生の意識構造について, 武道学研究, 17-1, 92-94, 1985.
- 12) 高橋 進, 矢野 勝: 柔道に対する中学生の態度について, 関東学園大学紀要, 14, 137-144, 1988.
- 13) 高橋 進, 矢野 勝, 磯村元信: 柔道に対する女子高校生の態度構造について——男子高校生との比較から——, 関東学園大学紀要, 16, 109-115, 1989.
- 14) 高橋 進, 貝瀬輝夫, 菅原正明, 森藤 才, 若林真: 大学生と高校生の柔道に対する態度の差異について——認知的側面と感情的側面の比較——, 武道学研究, 22-1, 33-44, 1989.
- 15) 矢野 勝, 高橋 進: 柔道に対する一般女性の意識構造について, 和歌山大学教育学部紀要, 38, 29-37, 1989.
- 16) 田中国夫: 新版現代社会心理学, 誠心書房, 281, 1977
- 17) 徳永幹雄, 金崎良三, 多々納秀雄, 橋本公雄: スポーツ行動の予測と診断, 不昧堂出版, 246, 1985.